

胃 がん 検 診 （ 地 域 ）

動 向

胃X線検査による胃がん検診受診者数は1994年までは増加傾向にあったが、その後は現在まではほぼ横ばいとなっている。これは、胃X線検査が日常臨床で使用されることが少なくなったことや、読影医が減少していることなどが原因の1つと考えられている。そのために、胃内視鏡による検診や、より簡単な検査として、ペプシノーゲン検査やヘリコバクターピロリ抗体検査によるリスク層別化の検診（ABC検診など）が普及しつつある。（当協会が受託している2町の集団検診においても、「胃がんリスク検診」が個別検診として導入された。）

従来の胃がん検診ガイドラインにおいては、死亡率減少効果が認められたものは胃X線検査のみであった。今回2015年4月に、国立がん研究センターより有効性評価に基づく胃がん検診ガイドライン2014年度版が公表された。それによると胃X線検査に続き胃内視鏡検査も対策型検診、任意型検診ともに胃がん検診として「推奨する」となった。ただし、胃内視鏡検査の死亡率減少効果についての評価研究をさらに進める必要と、偽陽性、過剰診断、偶発症などの不利益に関する検討が必要であるとコメントされている。一方、ペプシノーゲン検査（単独法）、ヘリコバクターピロリ抗体検査（単独法）、ペプシノーゲン検査とヘリコバクターピロリ抗体検査の併用法はいずれも対策型検診において「推奨しない」のままであった。リスク層別化と内視鏡あるいはX線を組み合わせた検診の死亡率減少効果に関する評価研究が必要とコメントされている。

横浜市ではすでに内視鏡による胃がん検診がモデル事業としてスタートしている。ガイドラインにより、内視鏡検査が胃がんの対策型検診としても推奨されたことから、他の市町村でも内視鏡検査による胃がん検診を取り入れることを考えていくものと思われる。

なお、協会は「神奈川県消化器がん検診機関一次検診連絡協議会」の事務局として、県内の一次検診実施機関が実施する消化器がん検診の精度・技術の向上のために協力している。

方法・結果

日本消化器がん検診学会より「新・胃X線撮影法ガイドライン 改訂版（2011）」が発行され、当協

会でも、そのガイドラインに基づいて胃X線検診を行っている。

胃がんX線検診受診者数は18,331名で、前年比で167名増加した。要精検者数は1,132名、要精検率は6.2%であった。これは、前年度の要精検率3.2%の2倍弱となっているが、2年前の要精検率9.7%よりは少なくなっている。精検受診者数は808名、精検受診率は71.4%で、前年度の精検受診率60.6%より上昇している。がん発見数は24名で、がん発見率は0.131%、陽性的中率は2.12%であった。がん発見率は前年度の0.077%より上昇していた。陽性的中率は前年度2.40%であり、やや低下したが、2%台をキープしている。（表1参照）

日本消化器がん検診学会による平成24年度消化器がん検診全国集計（表2）によると、地域検診における要精検率8.6%、精検受診率79.4%、がん発見率0.155%であった。当協会での成績は、要精検率、精検受診率、がん発見率ともに、やや低くなっていたが、全国集計による陽性的中率を計算すると1.81%となり、当協会のほうがやや上回っていた。

表1 胃がん検診（地域）
年度別要精検率・精検受診率・がん発見率

	26年度	25年度	24年度	23年度	22年度
受診者数 N	18 331	18 144	18 337	18 755	19 065
要精検者数 X	1 132	584	1 779	2 775	2 005
要精検率 X/N(%)	6.2	3.2	9.7	14.8	10.5
精検受診者数 Y	808	354	1 290	1 954	1 362
精検受診率 Y/X(%)	71.4	60.6	72.5	70.4	67.9
がん発見数 Z	24	14	23	35	27
がん発見率 Z/N(%)	0.131	0.077	0.125	0.187	0.142
陽性反応的中度 Z/X(%)	2.12	2.40	1.29	1.26	1.35

表2 地域・職域検診別の検診成績
平成24年度消化器がん検診全国集計より

	地域検診	職域検診	計
検診数	2 560 982	3 425 765	5 986 747
要精検者数	219 092	202 222	421 314
要精検率	8.6%	5.9%	7.0%
精検受診者数	174 024	87 309	261 333
精検受診率	79.4%	43.2%	62.0%
発見胃癌数	3 958	1 027	4 985
発見率	0.155%	0.030%	0.083%

関係の集計表は78頁に掲載